福島の児童文学者 13

冨田博之

霊山町出身で、日本児童文学会会長・児童劇作家・児童文化研究家・評論家として活躍していた冨田博之氏が、平成六年十二月二十一日に急逝した。享年七十二才であった。

冨田氏は、福島の演劇運動の生みの親であり、日本の児童演劇・学校劇運動の育ての親、そして『ゆかいな吉四六さん』『日本のとんち話』等の著者でもあった。

冨田　博之(とみた　ひろゆき)、大正十一年六月二十日、霊山村(現在霊山町)に生まれる。子どもの頃は、広瀬川で魚とりや水あそびをし、山のなかをかけまわって遊んでいたと、冨田自身が語っていた。中川尋常小学校、保原中学校卒業後、東京の旧制青山師範専攻科に入学する。在学中から学校演劇運動に参加し、斉田喬・落合聡三郎・栗原一登らと共に学校演劇をおこし、自らも学校劇を書いていた。卒業後教員生活を一年送り、後に、中国大陸へ出征二年間従軍する。敗戦後、一年近く野戦病院で入院生活をおくり、昭和二十二年に復員、霊山に戻る。

〔冨田と福島の演劇〕

帰郷後、福島市立第一小学校の教師となり、市内の岩間芳樹家に下宿する。教員生活をしながら、演劇活動もし「福島演劇研究会」を創設した。これには、福島在住で芝居好きだった正木蔚(さかり)・ミチル親子、岩間芳樹の父親等が参加し、アマチュア劇団(当時は自立劇団といった)が名乗りをあげ活動した。

冨田氏は、県内の自立劇団の連合体ばかりでなく、東北演劇連盟の構想を持ち、疎開していた青森の秋田雨雀や山形の大山功らとも連携をとった。この自立演劇運動は、戦後民主化運動の追い風を受け全国に広まっていった。

冨田氏上京後、「福島演劇研究会」は、正木ミチル氏に引き継がれた。

〔冨田と児童演劇〕

東京に戻ってからは、「日本学校演劇連盟(後に日本演劇教育連盟と改称)」の再建や、「児童劇作家協会(後に日本児童演劇協会と改称)」の結成に携わるが、肺結核に倒れ、三年間の療養生活を余儀無くされる。回復後は、児童演劇の研究、評論、創作に専念し、『演劇教育』('58　国土社)・『現代演劇教育論』('74　日本演劇教育連盟)・『日本児童演劇史』('76　東京書籍)を出版した。また、『児童劇集　ぼくはテレビのけらいじゃない』('62　国土社)は、児童演劇界に大きな影響を与えた。冨田氏は、児童演劇、演劇教育の理論化と、その資料の収集整理などにより、児童演劇の推進に幅広く貢献した。

昭和五十八年からは、タミ子夫人と共に自宅と蔵書を公開し、「東京子ども演劇資料館」を開館した。この資料館は、単に資料の蒐集・保存するだけではなく、活用し、研究者を育てる事を目的としていた。

〔冨田と児童文学〕

冨田氏と児童文学との係わりは、幼少時代にたくさんの民話を聞いて育った事に始まる。日本民話のほとんどを耳にしていた彼にとって、大人になり始めて知った「彦市ばなし」・「吉四六ばなし」は、新鮮なそしてとても魅力的な民話の世界であった。それに加えて、日本の児童文学や教育の世界で、ほとんど忘れられている「ウソばなし」に対する不満から、子どものために再話しようと考えた。

(「ウソばなし」というのは、ウソと知りながら、それを笑い、たのしみ、痛快がることをとおして、子どもの想像力をいきいき羽ばたかせるのに役立つお話である。)

「吉四六ばなし」とは、九州の一地方に伝えられる実話であり、「吉四六」とは、「彦市」と共に広く知られている日本民話の主人公の名前である。生まれは、豊後(大分県)野津市(のづいち)の豪農広田家で、本名広田吉右衛門、それがなまって「きっちょむ」とよばれるようになった。その「きっちょむ」に、「吉四六」の漢字をあてはめたのが、大分の吉四六研究家宮本清氏である。その「吉四六ばなし」は、原話のままでも充分おもしろいけれど、それは特定の地方に伝承されたものであり、日本の全ての子どもたちに楽しんでもらうために、肥後(熊本県)の彦市どん・高知県の「大作ばなし」・愛媛県の「彦八ばなし」・広島県の「彦六ばなし」・岩手県の「もんじゃの吉」等を比較しかさね合わせ、より明瞭な「吉四六」さん像を再創造し出版したのが『ゆかいな吉四六さん』('60　講学館)である。

冨田氏が書いたものは、「吉四六シリーズ」の他、『たいさくさんのちえくらべ』・『世界のわらいばなし』等、わらい話とんち話が多く、子どもたちが拍手喝采してよろこぶ本ばかりであった。子どもたちのために、もっと活躍して欲しかった。とても残念でならない。

参考文献

『ゆかいな吉四六さん』(講学館)
『日本古書通信　七七一号』(日本古書通信社)
『日本児童文学大事典』(大日本図書)